

日本産コガネムシ研究史(10)

高 橋 寿 郎

1942. Yawata, H. : Notes on the Glaphyrinae of Japan with descriptions of a new Genus and two New Species.

Trans. Kansai Ent. Soc. XII (1) : 33-37.

従来日本から知られていた *Anthypna pectinata* Lewis と新属 *Anthypnoides* 並びに之に属する2新種 *A. splendens* (与那国島), *A. auratus* (台湾) の記載であるが, 1950年澤田玄正博士の研究により前者は *Amphicoma pectinata* (Lewis), 後者は *Lichnanthe splendens* (Yawata) と訂正された。

1942. Sawada, H. : Two New Rutelline Beetles from Japan.

Trans. Kansai Ent. Soc. XII(1) : 38-40.

日本産2新種の記載である。即ち *Mimela takemurai* (Shikoku), *Anomala osakana* (Osaka), 前者は本州, 四国, 九州に後者は本州(西部), 九州, 屋久島に分布している。

1942. 澤田玄正: ドウガネとその近似種.

「関西昆虫学会会報」, XII(1): 41-49.

日本産ドウガネとそれに良く似た種計4種の解説である。本論文で次の1新 forma の記載あり, 即ち *Anomala viridana* (Kolbe), f. *izuensis*. 野村鎮氏によると(1969), *A. viridana* は *A. japonica* Arrow(1913) と異なる, 従って日本産は *A. japonica* の学名を使用すべきであるとされ, この変種は *A. japonica izuensis* と亜種扱となり forma として基本型以外2型が命名された。いずれも伊豆諸島産である。

1943. 野村鎮: Aegialiinae に就いて.

むし, XV: 109~112.

Aegialiinae 亜科の2種 *Aegialia nitida* Waterh., *A. hybrida* Reitter の記載, 後者は満州産として記録されているが北海道にも産する。学名は *Psammoporus comis* (Lewis) となる。さらに *Chirominae* 亜科とされていた *Caelius* 属も本亜科に入ると取扱われ *C. denticollis* Lewis の記載をされている。

1943. Yawata, H. : Eine Neue Aphodius-art aus Japan (Coleoptera, Scarabaeidae).

Trans. Kansai Ent. Soc., XIII(2) : 2.

Aphodius matsuzawai を本州長野産で新種の記載をされたが現在 *A. (Acrossus) rufipes* (Linné) のシノニムとして取扱われている。

1943. 澤田玄正: ヒメトラハナムグリ *Trichius succinctus* (Pallas) に就いて.

関西昆虫学会会報, XIII(2) : 4-7.

従来 *Trichius abdominalis* Ménériés と知られていた日本産ヒメトラハナムグリがチョウセンヒメトラハナムグリ *T. succinctus* (Pallas) と何等区別出来ないことを検討同一種として後者の学名を採用することを論ぜられた。

1943. 澤田玄正: 2種の *Anomala* 属金亀子に就いて.

「関西昆虫学会会報, XIV(1) : 14-19.」

日本産 *Anomala lucens* Ballion 及び *A. geniculata* (Motsch.) の2種についての論説.

1944. 中根猛彦: 糞虫類書書(I).

昆虫世界, 48(557) : 15.

Aphodius brachysomus Solsky の色彩についての記録と朝鮮産 *Aphodius* 及び *Onthophagus* の記録.

1945年(終戦時)以後の研究

所謂第2次世界大戦終了以後の研究時期に入ることになる。ここまで10回にわたって終戦迄の日本産コガネムシの研究に関して述べてきたが可成り長期間に汎りその間に新知見も加えられ, だいぶ訂正しなくてはならない所もあるのだが之等は機会を見て別にまとめて発表することとして終戦以後の研究の説明に入ってゆきたい。始めに概略的にこの時期を眺めて見る。

日本も範囲が狭くなったがかえって琉球諸島の詳しい研究となって現われ中根猛彦博士の食糞コガネムシの研究と合せ野村鎮氏の食糞コガネムシの研究がおこなわれ日本産のコガネムシの大要がほぼまとまった時代に入る。

戦前の糞虫ブームをつくった故・松村松年博士の新種記載を戦後いち早く中根猛彦博士が再検討し(1947), これから同博士の糞虫類の研究が始り次々と新種の発表があり, 「日本のこがねむし」(1~VIII, 1951~1961)の解説が公表され非常に参考になった。野村鎮氏も糞虫類の分類はもともとやっておられたのでこの時期中根博士と共同研究もあれば独自の記載もあり後, 琉球諸島の糞虫も手がけておられ遂には台湾の糞虫の分類迄やっておられる(1973, 1976)。

糞虫の研究はその後, 益本仁雄氏の「日本産コガネム

シ類解説」“食糞群”I-XI(1967), 同氏著「フン虫の採集と観察」(グリーンブック)によって啓蒙的な綜説をまとめられており(氏はさらに“台湾産食糞コガネムシ解説”1~5, 1976-1977 を発表しておられる), 塚本珪一氏はこの仲間を“食糞性コガネムシ群についての考察”と題して研究を続けておられる(1970-1974)。

1949年から「ソビエト連邦動物相大系」(Institut Zoologique de l' Academié des Sciences de l' URSS 出版の叢書, Faune de l' URSS) シリーズの1つとして「ソ聯のコガネムシ」(Faune U. S. S. R. Scarabaeidae, Vol. X, No. 1~5, 1949~1964) (食糞類) が発刊されたが日本産コガネムシも多くふくまれている。

1950年には戦後初めての「日本昆虫図鑑」(北隆館版) が出版された。

戦後も澤田玄正博士の研究は続いて発表され1950年には「琉球列島のコガネムシ類」がまとめられた。狭くなった日本の研究対象が琉球諸島に向けられた結果, 中根猛彦博士, 黒沢良彦博士, 野村鎮氏等によるこの地区のコガネムシが次々と研究され(Nakane, 1956, 1960, Nomura, 1961, 1962, 1964, 1965, 1970, 1972, Kurosawa, 1959, 1964, 1968), 1966年の野村鎮氏の「琉球列島産コガネムシ主科の動物地理学的研究」の様な総括的な論文が発表された。

日本本土からのコガネムシ類は戦前でもほぼまとまった感じがしないでもなかったが戦後の詳しい再検討で可成りの新種が記載された。なかでも澤田玄正博士のピロウドコガネ類の研究(1955), 野村鎮氏の同じくピロウドコガネ類の研究(1959-1976), 特に野村鎮氏の研究によってこの類の概略はほぼまとまった感じがする。尚同氏は台湾産のこの類の研究も同時に発表しておられる(1974), 大変参考になると共に極東地区のこの類の研究が次第に解明されてゆくことになる(氏はその後台湾産の Melolonthini 類もまとめておられる, 1977)。

クワガタムシ, コガネムシの幼期の研究もぼちぼち始まった(林, 1956., Medvedev, 1953), 梅谷献二博士の「コガネムシ類の消化管の比較形態学」(1957, 1961, 1964), 阿部, 東他による「クワガタムシ科5種の染色体」(1969, 1970), 藤山家憲氏の「糞虫化石の研究」(1968)のような特異な研究が現れた。

1960年には野村鎮氏の「日本産コガネムシ目録」が発表され戦前の三輪勇四郎・中條道夫両博士の目録以来戦後の日本のコガネムシをまとめたものとして重要な文献となった。クワガタムシ, クロツヤムシ科の目録も黒沢良彦博士によってまとめて出版された(1976)。

1963年には V. Balthasar 博士の「旧北区及び東洋区の Scarabaeidae と Aphodidae の綜説」が出版されそこには日本産の各種がふくまれている。

以上の間には1962年に中根猛彦博士, 野村鎮氏による「原色昆虫大図鑑」第2巻(甲虫篇)(北隆館版)の名著が現れ, 1966年には中根猛彦博士「日本の甲虫類」のような総合的なものも発表された。

野村鎮氏による上記ピロウドコガネ類以外のコガネムシ類の研究(1952~1977), 中には“アシナガコガネ属の再検討”(1968), “日本・台湾産の Mimetidae 属の再検討”(1976, 小林氏と共著), “伊豆諸島産コガネムシ主科の動物地理学的研究”(1969)というようなものがふくまれている。黒沢良彦博士による一連のクワガタムシ, コガネムシの研究, 新種記載(1969, 1970, 1973, 1975, 1976)とか中根猛彦博士によるヨーロッパの博物館の調査に基く日本産コガネムシ類の学名の検討(1972, 1976)新しく交尾器による分類の一つの試みを示された小林裕和氏の報文(1975), 小笠原諸島母島及び沖縄諸島のネプトクワガタの新亜種記載(1975, 1976)等々日本産コガネムシ相の全貌がほぼわかって来たと同時にまだ調べて見なくてはならない新しい点(案外普通種に)も残っていることがうかがえる現状である。

1947. 中根猛彦: 本邦産ダイコクコガネ群の種名の検討。

動物学雑誌, 57(4): 55~56.

主として松村博士の発表された(1934, 1936, 1937)ダイコクコガネ群の各種を検討整理された結果を発表。

1948. 中根猛彦: 日本産ダイコクコガネ属について。「新昆虫, I(2): 10-13.」

日本産ダイコクコガネ属4種の図説で従来の取扱の誤りをも訂正された。

1948. 中根猛彦: 糞虫覚書(II).

昆虫学評論, I(1): 10-12.

Aphodius obsoleteguttatus, A. nigrotessellatus の2種は十分に同定されていなかったためその相異を図説された。

1949. 澤田玄正: 日本産クロコガネ属甲虫の再検討。「昆虫, XVII(6): 14-16.」

日本産 Lachnosterna 属 7種の再検討。

(V-1978)